

## 日本語学習者における動作・感情を表す「を」「に」の習得に関する一考察

## — 中国語を母語とする学習者を対象に —

長栄大学応用日本語学科

蘇雅玲

## 1. はじめに

日本語において典型的に他動性の高い動詞は格助詞「を」をとりやすいとされている。本研究は動作や感情の対象を表す「を」の習得のプロセスを動詞の他動性 (角田 1991) を手掛りとする中間言語の発展過程として解明しようとするものである。プロトタイプ理論 (Rosch 1973) の観点から中国語を母語とする学習者が「を」を習得していく過程で遭遇する困難の原因について、述語の語彙的意味が名詞の格を支配するという観点に立ち、動作・作用が対象に及ぶ度合いが格助詞習得に影響を与えているのかに関して考察を行った。本調査で収集した実証的なデータを分析することを通じて、学習者の学習メカニズムをより明確に理解し、より効果的に習得できる学習環境や学習に有益な情報を提供することを目標としている。

## 2. 先行研究

Rosch (1973) によって提唱されたプロトタイプ理論では、人間が実際に持つカテゴリーは典型事例およびそれとの類似性によって特徴づけられると主張されており、プロトタイプ的カテゴリーの考え方が言語学上の概念にも適用されると考えている。第二言語習得の分野にプロトタイプ理論の考えを持ち込み、体系的な検討を試みようとする研究が進められてきた。Shirai (1995) は、日本人英語学習者を対象に多義性を持つ基本動詞 'put' に関する知識を調べた。基本動詞 'put' についてプロトタイプと言語転移の枠組みにもとづいて調査した結果、プロトタイプ性の低い意味は学習者にとっては習得しにくいということが分かった。これは、ある文法項目を学習する際に学習者はよりプロトタイプ性の高いものから習得するが、そうでないものはなかなか使いこなせないということである (白井 1998)。

本研究では、日本語を第二言語とする学習者が格助詞「を」「に」を習得していく過程において、学習者が中間言語をどのようなプロセスを経て構築していくのかを研究課題とし、プロトタイプ理論を用いた説明を試みる。

## 3. 調査概要

## 3.1 調査対象

本研究で分析の対象とする日本語学習者は、台湾にある大学の日本語学科に在籍する学生である。JESS 日本語能力試験 1 級・2 級にあたる模擬試験の文法問題にもとづいて事前テスト (計 35 問) を行い、事前テストの結果によって被験者を上級学習者 (正解数 26~35 問)、中級学習者 (正解数 11~25 問)、初級学習者 (正解数 1~10 問) の 3 つのグループに分けた。本発表では、事前テストで中級学習者と判断した被験者を中心に考察を行うことにした。

### 3.2 調査内容：格助詞習得における動詞の他動性の影響

角田 (1991) およびヤコブセン (1989) が提案した他動詞の原型を参考にして、「具体的な身体動作」「動作が対象に及ぶ」「明らかな変化を起す」「『がーを』をとる」という 4 つの特徴を他動性の基準として、「+」が多ければ多いほど、他動性の度合いが強い動詞であると判断する。各特徴につき、持っている特徴を「+」で示し、持っていない特徴を「-」で示す。「+」が多ければ多いほど、プロトタイプ他動詞とされやすいのである。

表 1. 動詞分類の仕組み

	殺す	調べる	のぼる	尊敬する	泊まる	同情する
具体的な身体動作	+	+	+	-	+	-
動作が対象に及ぶ	+	+	-	-	-	-
明らかな変化を起す	+	-	-	-	-	-
「がーを」をとる	+	+	+	+	-	-

以上の方法を利用し、個々の動詞の他動性を検討して動詞分類を行った。「を」をとる動詞と「に」をとる動詞を分けて、他動性の強さにしたがって順番に動詞を表 2 のように 7 種類に分類した。

表 2. 動詞分類

動詞分類	動詞例
「強他動性 (A)」	殺す、攻撃する、動かす、汚す、沸かす、倒すなど
「弱他動性 (B)」	慰める、叱る、騙す、誘う、調べる、訪ねるなど
「移動 (C)」	離れる、歩く、はずす、渡る、旅行する、卒業するなど
「精神的活動 (D)」	尊敬する、嫉妬する、やめる、楽しむ、憎むなど
「移動 (E)」	泊まる、座る、入る、近づく、着く、通う、乗るなど
「精神的活動 (F)」	同情する、甘える、失望する、憧れる、熱中するなど

### 3.3 調査結果

調査の結果は以下の表 3 のようにまとまっている。「を」をとる「強他動性 (A)」、「弱他動性 (B)」、「移動 (C)」および「精神的活動 (D)」の 4 種類を観察すれば、他動性の強弱にしたがって正答率の高低が順番に変化してゆき、他動性が弱ければ弱いほど正しく「を」を答えられる被験者が減っていくような傾向が見られた。また、「に」をとる「移動 (E)」および「精神的活動 (F)」の結果を見ると、「に」という格標識が 6 割ぐらゐの被験者によって習得されていることが示されている。

表 3. 各動詞分類における正答率

	正答	正答率
「強他動性 (A) 」	「を」	71%
「弱他動性 (B) 」	「を」	58%
「移動 (C) 」	「を」、「から」	57%
「精神的活動 (D) 」	「を」	42%
「移動 (E) 」	「に」、「へ」	64%
「精神的活動 (F) 」	「に」	63%

## 4. 考察

### 4.1 「を」をとる動詞

表 4 によると、プロトタイプの他動詞である「強他動性 (A) 」は他動性の度合いが高く、意味的に理解しやすいため、目的語の典型的な格標識である「を」をとる他動表現が習得されやすい。一方、他動性が弱まると、動詞そのものから得られる手がかりが徐々にとらえにくくなるため、対象物に対して「に」をつける可能性が高まる。

表 4. 「を」をとる動詞における「を」および「に」の回答率

	「を」	「に」
「強他動性 (A) 」	71%	11%
「弱他動性 (B) 」	58%	32%
「移動 (C) 」	55%	25%
「精神的活動 (D) 」	42%	38%

「太郎が苺 \_\_\_ 潰しました。」「太郎が車 \_\_\_ 動かしました。」などの問題では、70% 以上の被験者が「を」と答えた。これらの動詞は、いずれも動作主が対象物に対し働きかけて一定以上の負荷が加わり、対象物がそれによってその外観や状態を変えるという行為を表すものであり、いわゆるプロトタイプの他動詞である。このように、対象に目で見える必然的な変化をもたらすプロトタイプの他動詞は強い他動性を帯びているため、語彙的意味や格標識を理解することが簡単であり、学習者はこのような他動詞らしい動詞に対して「を」が正確に使い、「に」などの誤用が少ないと考えられる。一方、「弱他動性 (B) 」 「移動 (C) 」、例えば「慰める」「歩く」などは、対象物に影響を与えないという点で他動性の度合いが「強他動性 (A) 」よりは弱い。そのため、「を」の回答率が 60% まで下がっていった。更に「尊敬する」「目指す」など「精神的活動 (D) 」に属する動詞は格標識の面においては、日本語では他動詞として用いられ、中国語でもほとんど及物動詞 (他動詞) として用いられる。日中両言語の文法体系にあまりズレがないので、学習者はここで「を」を使用することが予測されたが、やはり他動詞の原型から離れ、周辺的な他動詞であると見なされている。意味的側面としては、典型的な他動詞の意味特徴とはかなり異なるためか、「を」の回答率が更に下回って、「に」の回答率が 40% 近くになった。

以上のことによって、他動性の低下によって「を」「に」の習得状況にも変動が生じることが事実として認定できると考えられる。

#### 4.2 「に」をとる動詞

同じく人間の移動、または人間の感情などを表すが、「を」をとる「移動 (C)」「精神的活動 (D)」と異なって、「移動 (E)」「精神的活動 (F)」は日本語で「に」と共起する。本研究では、この2類は「移動 (C)」「精神的活動 (D)」より他動性が弱いと判断したが、下の表 5 を見て分かるように、学習者において、「移動 (E)」「精神的活動 (F)」における典型的な他動詞の格標識「を」の回答率は 20% 弱であり、格標識「に」の受容性が認められた。

表 5. 「に」をとる動詞における「を」および「に」の回答率

	「を」	「に」
「移動 (E)」	16%	62%
「精神的活動 (F)」	22%	63%

「弱他動性 (B)」の類から他動性の度合いが少しずつ他動性が弱まってきて、「精神的活動 (F)」の類はもっとも他動性の弱い動詞類である。他動性がここまで低下してきたので、学習者にとってプロトタイプ他動詞の典型的な格標識「を」がいつそう使いにくくなり、周辺的な格標識「に」のほうが共起しやすくなると考えられる。

#### 5. おわりに

中国語を母語とする学習者が日本語を学習していく過程において遭遇する格助詞の誤用のうち、「を」「に」を中心に横断的調査の結果をもとに、「格助詞習得における学習者の誤用」について考察を進めた。分析結果により、他動性の強さに相関して学習者における格助詞「を」の習得が容易になることが判明した。しかし、今回の分析は中級学習者のみ対象に行われ、被験者数も限られている。そのため、調査で収集した上級および初級学習者の資料も入れてそれぞれの結果を比較し、またもっと多人数でデータを分析・考察することが不可欠であると考えられる。

#### 参考文献

- Rosch, E. (1973) On the internal structure of perceptual and semantic categories. In: Moore, T. E. (ed.) *Cognitive development and the acquisition of language*, 111-144. New York: Academic Press.
- Shirai, Y. (1995) The acquisition of the basic verb PUT by Japanese EFL learners: Prototype and Transfer. 『語学教育研究論集』 12: 61-92. 大東文化大学語学教育研究所.
- 白井恭弘 (1998) 「言語学習とプロトタイプ理論」. 奥田祥子 (編) 『ポーターレス時代の外国語教育』: 86-104. 東京: 未来社.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 東京: くろしお出版.
- ヤコブセン, W. M. (1989) 「他動性とプロトタイプ論」 『日本語学の新展開』: 213-248. 東京: くろしお出版.